

修士論文（要旨）

2014年1月

大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制態度の関連
—親しさの違いに着目して—

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻

212J4010

森田 美雪

目次

I 問題の背景と所在 1

II 本研究の目的 1

III 方法 2

IV 結果と考察 3

V 今後の課題 3

引用文献

I 問題の背景と所在

青年期である大学生にとって友人は特に重要な存在であり(岡田, 2006)、青年にとって友人関係は重大な意味を持っていると考えられる。このような重大な意味を持っている相手だからこそ自己開示したい、しよう、しなければということが起きる一方で、重大な意味を持っている相手だからこそ、かえって自分のなかで湧き上がっている感情や思いを相手に伝えることができない人がいるということも考えられる。

丸野(1987)の対人相互交渉モデルによれば、被開示者との関係が親密なものであれば「相手を傷つけない」という配慮から、深層的な自己開示ではなく、表層的な自己開示に留めることもあるという。このことから相手との関係に何か影響を与えるのではないかという恐れや、不安、相手を大切と思う感情が存在することによって、特に親しい相手に対して自己開示を抑制することがあるのではないかと考えた。そこで、本研究では、大学生の友人関係における自己開示の量と深さ、および自己開示を抑制する傾向と理由を、同性の知り合ったばかりの友人と同性の親しい友人という親しさの違いに着目して検討することを目的とする。

II. 本研究の仮説

- ① 親しい同性の友人に対する自己開示の量と深さ、自己開示を抑制する傾向と理由には、知り合ったばかりの同性の友人との違いがある。
- ② 親しい同性の友人に対する自己開示の量は、自己開示を抑制する理由のうち「弱みの隠蔽」および「相手への配慮」との間に関連がみられる。
- ③ 自己開示の量・深さ、および自己開示を抑制する傾向・理由には性差がある。
- ④

III. 方法

都内私立大学生 253 名(男性 90 名、女性 163 名)を対象とし、質問紙調査を行った。

調査用紙は 2 種類用意し、一方は「同性の知り合ったばかりの友人」を、もう一方は「同性の親しい友人」を思い浮かべてもらい、その思い浮かべた友人のイニシャルの記入を求め、思い浮かべた友人に対してどのぐらい詳しく自分について話すか回答を求めた。この 2 種類の調査用紙は同数用意し、調査対象者にはランダムにいずれかを配布した。

以下に、調査用紙の具体的な内容を示す。

①フェイスシート

大学生が、自分のことについて友人に対してどの程度話しているのか把握するために調査を行うことを記載し、対象者の年齢、性別についての質問項目に記入を求めた。これらの質問項目は、年齢は青年期という発達の視点から、対象者が青年期に該当するのか確認するために、性別は性差の検討のために項目を設けた。

②自己開示の深さを測定する尺度

本尺度は、自己開示するかしないか、どれくらいするか、というだけでなく、どのような内容を自己開示するかに重点を置き、その内容を深さという視点から捉えようと試みた尺度です。本研究では、自己開示量、およびそれぞれの深さにおける自己開示量をはかるために使用した。本尺度は、自己開示の内容を、レベルⅠ（趣味）、レベルⅡ（困難な経験）、レベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）、レベルⅣ（否定的な性格や能力）と階層的に扱い、深さを想定している点に特徴がある。

③自己開示抑制態度尺度

ストレスのかかった経験内容に関して、どのような理由から被開示者に対する自己開示を抑制するかを検討する研究において用いられたものである。自己開示を抑制する理由について、「弱みの隠蔽」、「自己解消」、「相手への配慮」、「あきらめ」、「気晴らし希求」の5因子から構成されている。本研究では、友人に対する自己開示を抑制する傾向と理由をはかるために使用した。なお、この項での自己開示をする相手は②の質問項目で想起してもらった友人とした。

Ⅳ. 結果と考察

大学生の友人関係においては、友人に対する親しさの違いによって、自己開示には違いがみられ、親しい同性の友人に対しては、知り合ったばかりの同性の友人に対してよりも多くの自己開示を行い、また自己開示を抑制せず、深い内容の自己を開示しやすいことが示された。男性と女性の自己開示の深さと自己開示を抑制する理由の関連については、自己開示を抑制する理由について、男性と女性で自己開示を抑制する理由が明確に異なり、親しさの違いも含めるとその特徴がさらに明らかとなることが示された。男性は、知り合ったばかりの同性の友人に対しては、明確な自己開示を抑制する理由がみられなかったのに対し、親しい同性の友人に対しては自己開示のどの深さにおいても「あきらめ」が自己開示を抑制する理由であることが示された一方で、女性は知り合ったばかりの同性の友人群、親しい同性の友人群のいずれも「弱みの隠蔽」、「自己解消」、「あきらめ」が自己開示を抑制する理由となっていることが示された。特に、親しい同性の友人に対しては、すべてのレベルと「弱みの隠蔽」の間に関連が認められたことから、「弱みの隠蔽」は女性の親しい友人に対する自己開示を抑制する理由の一つの特徴であることが示唆された。

このように、友人に対する親しさの違いだけでなく、性別によって自己開示を抑制する理由に差がみられたことは、今後の自己開示研究において、親しさの違いと性差を複合的に着目して研究を進めていく必要があることを示唆する研究となったと考える。また、榎本(1997)の論じた性役割観、これまでの研究で得られた自己開示の性差の研究結果、本研究の結果を踏まえ、さらに自己開示と社会的な性役割との間に関連がみられるのか、性役割の視点を取り入れた自己開示研究を行うことには意義があるだろう。

V. 今後の課題

今後の課題としては、2 つある。第一に、対象者の性別で人数の偏りがあったことである。分析対象者全体を見ると、回答者の半数以上が女性であり、男性の回答者が少なかった。男性のデータは、調査用紙回収時には女性より少ないものの、回収できていた。しかし、データ選別の際に落ちてしまうものが多かったため、今後の研究においては、男女の割合を均等にする必要があると考える。第二に、友人に対する親しさの基準が明確でなかったことである。本研究では、調査用紙に回答する際に想起した友人のイニシャルを記載するよう指示していた。特に、知り合ったばかりの同性の友人については、具体的にいつまでに知り合った友人という明確な指示をしていなかったため、回答者によってはある程度親しくなった友人を想起している可能性も考えられる。

今後、研究を行う際には、調査対象者の性別の人数をそろえること、友人に対する親しさについて明確な基準を設けることが必要である。

引用文献

- 丸野俊一 (1987). 社会的相互交渉モデルに関する理論的考察 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 32, 41-64. (丹羽・丸野, 2010 より引用)
- 丹羽空・丸野俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, 18 (3), 196-209.
- 岡田涼 (2006). 青年期における友人関係への動機づけの発達的变化—横断的データによる検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 53, 133-140.
- 武田裕子・前田健一・徳岡大・石田弓 (2012). 大学生の親密度の異なる友人への自己開示と親和動機の関係 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 11, 37-108.
- 兪善英・松井豊 (2012). 配偶者に対する消防職員のストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼす影響について 心理学研究, 83 (5), 440-449.